

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文は、1960年代の前後の米国における、精神遅滞児（知的障害児）や学習障害児のカリキュラムや、その構成原理となりうる教育観、知能観などを探る試みとして展開されている。精神遅滞や学習障害などの子どものためのカリキュラム開発の事例を取り上げることで、支援を必要とする子どもの教授学習活動の特徴の探究を行うことがねらいとされている。近年、インクルーシブ教育推進の国際的な動向の影響などもあり、特別な教育的支援を必要とする子どもへの対応が課題となっている。しかし、要支援児へのカリキュラム開発の事例や展開に注目した研究は少ない。本研究は、米国の20世紀後半のカリキュラムの事例から、その知能観や学習内容の構成と組織化に注目したものである。その点において、アメリカ教育史研究への貢献、特別教育のカリキュラム開発の系譜を明らかにする研究として意義がある。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究においては、大きく以下の点に注目した検討が行われている。

第一に、1960年代の知能観について検討である。要支援児の学習カリキュラムの基底をなすと考えられる知能観に着目するために、いわゆる遺伝-環境論争や、発達の量的遅滞論-質的差異論という軸を、同時代の論者の主張を広く渉猟しながら、検討を行っている。合わせて、文化性-家族性精神遅滞など、同時期に特徴的な障害観についても、文献研究として適切な方法が採られている。第二に、精神遅滞児教育や学習障害児教育のカリキュラム構成原理についての検討である。職業的自立や生活適応、経験主義といった特徴を、イリノイ州、マサチューセッツ州などのカリキュラム・ガイドや、カリキュラム・プラン等の内容を検討している。合わせて、それぞれのカリキュラム・ガイド等の策定に中心的な役割を果たした論者の議論も参照することによって、その内容構成の原理を明らかにしている。

第三に、1960年代とその直近の時期への注目である。障害当事者の施設収容からコミュニティへの移行とそれに連動した学校教育の拡充という変化を経験した時期である一方で、いわゆるインテグレーションが具体的に提唱されるようになる前の萌芽期であるともいえる。公民権運動や、マイノリティ児童の社会参加の促進と、学校での低学力問題とが、広く社会課題となっていたことを、カリキュラム・ガイドと同時期の資料とを関連づけて検討している。

いずれも、カリキュラムの現代史的研究として適切な方法が採用されている。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究は、カリキュラムの構成原理に関する現代史的研究として展開されている。その研究の趣旨に即し、イリノイ州、マサチューセッツ州により策定された、特別教育のカリキュラム・ガイド、カリキュラム・プランが広く収集され、また、収集されたデータは、カリキュラムを教科や領域ごと、またそれらに関連づけた学習活動の目的や内容、単元の特徴等について、具体的な検討がなされている。また、従来のカリキュラム研究の知見もふまえ、カリキュラム・ガイド等の策定に中心的な役割を果たした論者や機関の資料や、同時期の障害者観を示す論稿も検討の対

象に加えることで、分析対象となるカリキュラムの社会的布置を明らかにしている。

以上のことから、本論文における研究資料やデータの収集および分析は適切なものと判断される。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究では、1960年代の前後の米国に焦点を注目して、精神遅滞児や教育遅滞・学習遅滞などと称される子どもの知能観に関する議論と、カリキュラム開発の事例を取り上げることで、支援を必要とする子どもの教授学習活動の特徴を探究している。精神遅滞児の知能をめぐる言説の展開に注目して、知的障害の同時代的な見方を探り、文化性・家族性精神遅滞の分類の中に、知的障害をめぐる遺伝の面からの理解と環境面からの理解の双方の要素を見出すことができ、特別教育の指導やカリキュラムに大きな変化をもたらしたことを明らかにしている。また、職業教育のカリキュラム、プログラム開発については、就労の可否を基準として、教育対象としての精神遅滞児の再分類がなされたことを明らかにしている。さらに、マサチューセッツ州、イリノイ州のカリキュラムの検討から、職業準備教育の可否による教育可能性の再定位、教科学習の目的や内容、教科や領域を横断する学習单元等の構成や、学習内容の構成上の特徴が明らかにされている。以上のことから、本論文において述べられている研究の考察と結論は妥当であり、学術的な水準に十分に達していると認められる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究では、米国における特別教育のカリキュラム開発について、現代史的なアプローチにより、カリキュラムの単元の組織、構成原理を明らかにしており、同時代的な社会状況における障害の定義や教育可能性の定義をふまえた検討が行われている。このことは、米国障害児教育史研究が制度・政策研究を中心として展開されてきたことに鑑みると、重要な貢献である。また、カリキュラムの検討による教科や領域の構成や学習单元の内容構成についての検討は、今日の特別支援教育のカリキュラム開発に重要な知見を提供する理論研究としても意義がある。このように、本論文の学術上の貢献は高く、きわめて重要な価値があると判断される。

以上に示すところにより、審査委員は全員一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位を取得するに相応の水準にあると判定した。